

talk! talk! talk! 探検家・関野吉晴さん



探検家

関野吉晴さん

探検家にして医師でもある関野吉晴さん。1993年より人類の足跡を逆ルートで辿る“グレートジャーニー”に挑み、そこで出会うたくさんの人々の写真を撮り続ける。自らの脚力と腕力だけで異文化、異民族に飛び込み、触れ合う関野さんの姿は毎回テレビでも放映され、多くの人の感動を呼んでいる。
今月、関野さんについては“グレートジャーニー”最後の旅に出る。出発直前の関野さんに、旅への思い、撮影の苦労話について話してもらった。

プロフィール

1949年、東京生まれ。1975年、一橋大学法学部卒業。1982年、横浜市立大学医学部卒業。一橋大学在学中に探検部を創設、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。その後医師となり、25年間に32回、通算10年間以上にわたって南米への旅を重ねる。1993年からは、『グレートジャーニー』に挑んでいる。1999年、植村直己冒険賞受賞。
著書に『南米大陸』（朝日新聞社）、『ギアナ高地』（講談社）など多数。グレートジャーニーの旅と並行して写真集『グレートジャーニー〜』(毎日新聞社)、子供向けノンフィクション『グレートジャーニー人類5万キロの旅〜』(小峰書店)を刊行中。

『グレートジャーニー』とは？

400万年前、東アフリカで誕生したといわれる人類。後にアフリカを飛びだし、アジアに広がった人類は、やがて極北の地を経て、南米大陸の最南端パタゴニアに達して現在に至る。

学生時代から南米に通い続けた関野さんは、我々と祖先を同じくするアジア系の民族モンゴロイドと触れ合ううちに、ある一つの疑問を抱くようになった。『彼らはいったいどこから、どのようにして、いつ頃この地にやってきたのだろうか？』その答えを求めべく、パタゴニアを出発点とし、人類誕生の地である東アフリカを目指す関野さんの長い旅が始まった。400万年に及ぶ人類の大移動を逆ルートで、自らの腕力と脚力だけで遡る旅、それが『グレートジャーニー』である。1993年から出発したこのグレートジャーニーは、現在第八期を迎え、関野さんは7月20日、ついにゴールの東アフリカを目指す最後の旅に出発する。



モンゴロイドは、そして我々人類はどこから来たのか？

まず、グレートジャーニーを始められたきっかけを教えてください。

私は学生時代から南米に通い始め、1971年から20年間、特にアンデス・アマゾンに行き、先住民の人達と同じ屋根の下で、同じものを食べながら暮らすという旅をしてきました。

もともと南米の人々が日本人と同じ先祖を持つモンゴロイドである、ということは知ってはいました。しかし、実際に行ってみて、本当に彼らが私たちに似ていることにまず驚きました。

そうして20年通ううちに、彼らは本当にどこから来たんだろう？と思い始めたんです。ベーリング海峡を越えて来た、ということとはわかるけれど、実際にどこが基準で、どうやって来たのだろうか？ということだんだん知りなくなってきました。そのルートを辿る旅をしようと思って始めたのがグレートジャーニー、というわけです。

学生時代から20年間も通うほど、南米に惹かれたきっかけは？

とにかく、これまで住んできた文化と全然違う未知の世界に自分を放り込んでみたかったんです。それは南米でもよかったし、インドでもアフリカでも、どこでもよかった。だから、最初インドに行っていたらインド通っていたかもしれないし、最初アフリカに行っていたらアフリカ通っていたかもしれない.....(笑)。

でも、世界のいろんな所に住んだことがある人達に話を聞くうちに、特に自分の琴線にひっかかったのがなぜかアマゾンだったんです。まあ、運命ですよ。それで1回行ったら面白かったので、毎年行くようになっていったんです。

グレートジャーニーは、人類の大移動を逆ルートで遡っていらっしゃるんですが、なぜ、移動とは逆のルートで目指そう、と思われたのですか？

最初の目的は、モンゴロイドの起源を辿ろうということでした。しかし、遺伝子レベルの研究が進んでくると、実は人種を分ける差異というのは明確にはないんです。そうすると、結局、人種分けなんて仮りのものにしか過ぎず、個々の起源を求めることなん

てできませんよね。それでも、共通の祖先というはあるわけで、つまりそれは、人類の起源に当たります。

だから、最終的にはモンゴロイドの起源を求める旅、というよりは、人類の起源を求める旅になったのです。なぜ逆ルートか、というのは、もともと南米に通っていて、そこに住む人はどこから来たのだから？あるいは、自分もどこからきたのだから？という発想から始まったので、それで南米からスタートしました。

旅の計画をたてるにあたって、何か自分で作った決まりごとなどはありますか？

まずは、移動手段に車を使わない、ということですね。基本的には自分の腕力と脚力だけで行きます。でも、犬ぞりや馬を自分で操るのはOK、というふうに、動物に乗ることはよし、といった自分なりのルールを作りました。

コースに関しては、要するに面白いコースですね。人類が辿ったルートというのは、正確にはわからないわけです。実際にはいろんなコースを辿っただろうし。だから、逆にいうと自分の辿りたい道を辿るようにしています。



自分の目で、耳で、口で、新しい価値観に触れる

関野さんは、冒険家と探検家を分けて考えていらっしゃるようですが、そこにはどんな違いがあるのでしょうか？

まあ、あまり厳密な区分けをしているわけじゃないんですけど（笑）。

例えば、ある場所を目指して行く時に、冒険家だったら、誰かが一回その道を通ってしまったら、バリエーションを変えてもっと困難な道を行くとか、あるいはもっと困難な季節に行こうとしますよね。冒険家は、その困難を切り抜けた達成感、満足感というのが目的です。

探検家の場合は、そこに行くこと自体が目的ではなくて、そこで何をするか、何を見るか、が目的になります。僕は、そこでいろいろの人に会って、一緒に暮らしてみ、友達になる。そして自分の目で見て、耳で聞いて、自分自身の口で彼らと話をし、新しい価値観を知るといって、それが旅の目的になりますね。あるいは、こちらの価値観を相手にも伝え、お互いに理解しあう、ということもね。そういう意味で、自分は探検家に近いと思います。だから、もちろん冒険的なコースもありますけれど、危険はできるだけ避けて行くようにはしていますよ。

そういった旅の中で、関野さんはどんな出会いを求めているのですか？

どこに行くときでも、魅力的な人、自分に何か影響を与えるような人、できたら自分の生き方をコロッと変えてくれるような人に会えたらいいな、いつも思っています。日本を出て旅の途中で会う人々は、やはり価値観が私たちとは全然違いますから、得るものは大きいですよ。

第七期では、ラクダと一緒にゴビ砂漠を横断、そしてチベット、ヒマラヤを旅されましたね。この旅で特に印象に残されたことはありますか？

第七期の旅で特に目立ったのは祈りでした。

例えば、チベットにある聖地カイラスでは、たくさんの巡礼者に会いました。カイラス巡礼者の最大の目的は、カイラス山のゴルラを、徒歩あるいは※五体投地で巡ることです。一周の長さはおよそ52キロ。これを徒歩で一日で回ってしまいます。13周することが多いのですが、108周する人もいます。これを五体投地で回ると、一周するのに2~3週間かかります。祈りとは、やはり人間特有のもので、なぜ人間は祈るのかということをしじゅう考えながら旅をしましたね。

※ 五体投地：両膝・両肘・頭を地につけて、尊者の足下を拝すること。五体投地で進む、というのは、全身を地面に放り出し、祈りながらシャクトリムシのように進む。



ラサのチョカン寺の巡礼者：チベット仏教の聖地、ラサで五体投地をする巡礼者。



カイラス山：チベット仏教、ジャイナ教、ボン教、ヒンズー教の最高の聖山。全国から信者が巡礼に訪れる。



ゴビ砂漠でのラクダの出産：ラクダは出産シーズンに姿を消してしまうので、立ちあえることは非常に珍しい。なかなか産み落とせないラクダに、オーナーが手を貸す。



生まれてから1週間後の子ラクダ。

ラクダでも旅されたわけですが、ラクダに乗るのはどうですか？お尻とか痛いのでは.....？

痛いですよ。歩いている分には痛くないんですけど、走らせると、上下に大きく揺れて体ごと弾んでしまうので、お尻は痛いですね。

馬に乗る要領と似ていますか？

うん、かなり似ていますね。ただ、馬より高いので、落ちたら怖いという.....（笑）。ゴビ砂漠では、珍しいラクダの出産シーンに立ちあうこともできました。たまたま一緒に移動していた60歳の男性が、このラクダはもうすぐ産まれる、ということを教えてくれたので、ずーっと観察していました。

伝統社会のたくさんの人々と出会って、私たち日本人と比較した時、何か感じられることはありますか？

やはり、皆で助け合う、といった人間同士の関係の深さ、というものが、伝統社会にはまだまだ残っています。厳しい環境の中で、順応して生きているわけですから、助け合って生きていかなければならないし、その中から生まれる絆は強いんです。それから、今の我々の社会は、生まれてから、いい学校、いい大学に入り、いい就職を探し、社会でいい地位を得る、そうやって

知らない間に年をとって、いつも何かが先送りされている気がしますね。伝統社会の場合、例えば狩猟民の場合、狩りに行く時、彼らは喜々として出かけていきます。今やっていることの結果が今すぐ出ている喜びがあるのです。その違いは大きいですね。確かに便利で物があふれて快適で、というはあるけれども、どちらがより楽しんで生きているか、というのは難しいですね。

本当に撮りたいものに会えば、どんな状況も苦にならない

ところで、関野さんはグレートジャーニーの写真集も発行されていますが、どんなカメラを使っていますか？

35mmの一眼レフを、常に2、3台持ち歩いています。ニコンのカメラは、F4とF-801を使っています。壊れにくいところがいいですね。

暑さあり、寒さあり、ほこりありで、かなり撮影も大変だと思いますが、何か気を遣っていらっしゃることはありますか？

砂ぼこりが一番やられますね。寒さでカメラがやられるということはほとんどないです。でも、寒いとやっかいなのは電池の問題ですね。だからいつも電池を2つくらい袋の中に温めておいて、しょっちゅう取り換えています。寒さによって違うけど、-30度くらいのところだったら、20分くらい温めておけば、15分くらいは電池が持ちます。

それから、中南米、ロシア、モンゴルでは電池がなかなか手に入らなかったんですよ。だから今移動している所は簡単に手に入るのに、昔のくせでいつもバックにいっぱい持ち歩いています（笑）。

それは重そうですね（笑）。でも、厳しい状況の中で、カメラを出したり入れたり、大変じゃないですか？

それは、被写体にもよりますね。どんなに辛くても、本当に撮りたいものに会えば、どんなことも苦に感じません。

戻ってきて写真を見たとき、いろいろなことを思い出されますか？

そうですね。特に、人間の写真。先方で彼らと一緒にいた時のことを思い出します。現地で親交を深めた人たちの写真だとなおさらですね。



交易の民：チベットの塩を南へ行ってトウモロコシと換えるキャラバン。



ヒマラヤ奥地・籠の中の子供：両親、兄、姉が畑仕事をしている間、籠の中で帰りを待つ赤ちゃん。子供は6歳くらいになるともう畑仕事を手伝い始める。

いよいよグレートジャーニーのゴールを迎えられるにあたって、どんな気持ちですか？

うーん、まあよくここまで無事に来られたな、っていうのはありますね。あとは、これまでと同じように、気を抜かず、そしてまた新しい人々との出会いを求めていこう、と思っています。

グレートジャーニーを終える寂しさみたいなものはありますか？

それはないですね。まだまだ行きたい所、やりたいことはいっぱいあります。今までの旅の一つが終わるだけで、また次が始まるんだ、という気持ちです。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.